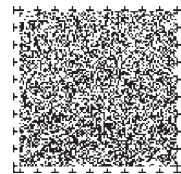


①所沢インターナショナルファミリー ～海外研修員との交流～

所沢インターナショナルファミリー 小田良子



私たち所沢インターナショナルファミリー(TIF)は所沢市内で国際交流・国際理解を進める活動をしている市民グループです。外国の人を対象とした日本語教室を中心に、パーティーなどの交流活動や専門家を招いての学習活動を行っています。日常交流をしているのは市内在住の外国の人たちですので、国立障害者リハビリテーションセンターの海外研修員の皆さんとの交流は、私たちにとって活動の一つのアクセントであり、毎年夏のJICA補装具製作コースの研修開始を前に交流の計画を立てる事が恒例となっています。

TIFの発足は1988年ですが、JICA研修員との交流は当時までさかのぼることが出来ます。会発足のきっかけとなった所沢市教育委員会主催の「国際理解入門講座」でJICA八王子国際センター(当時)の研修員のホームステイが実施され、発足後も初年度から八王子滞在の研修員との交流活動を行っています。その後、地元所沢のリハビリテーションセンターと環境調査研修所で研修を受けるJICA研修員の皆さんとの交流が始まりました。歓迎会や会員宅へのホームビジットやホームステイ、ところざわまつりやお茶会で日本文化に触れていただくことなど、会員

でアイデアを出し合い様々な交流をしてまいりました。パーティーで歌や特技を披露していただいたこと、夜に開講している教室で日本語学習のお手伝いをさせていただいたこともありました。帰国後も手紙のやり取りなどの交流を続けている会員もおります。

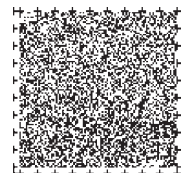
リハビリテーションセンターには海外研修員以外にも海外からの研究者もいらっしゃいます。そういった方も含め、限られた期間ですが日本を知っていただき、良い思い出を持って帰国していただこうと、地元のボランティアとしてささやかな活動をしてまいりましたが、私たち自身、交流を通して外国の人と触れ合い楽しい時を過ごす以上に意味のある経験をさせていただいていると感じています。

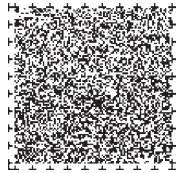
市内に在住する外国人は中国などアジア出身の人が多いのですが、JICA研修員の皆さんは発展途上である中南米やアフリカなどの地域からの来日で、中には紛争地と呼ばれる国からの人、厳しい条件の中から苦勞して研修の機会を得た人などもいらっしゃいました。出身国の様子や研修にかかる意気込みなど何うにつけ、情報に接する機会の少ない国々への理解を深めることができました。また補装具製作部や国際協力係の職員の方々をはじめ、センターを挙げて研修と研修員をサポートして下さる様子を拝見し、広く日本の国際協力にも関心が広がり、リハビリテーションセンターやJICA東京国際センターの見学などの活動にもつながりました。

時代の流れとともに私どもの活動のすすめ方や研修のスケジュールも変わり、以前のように多くの交流の機会を設けることが難しくなっていますが、会員の目を広く世界に向ける機会を提供して頂いていることに感謝し、身近に世界とつながる先進的な施設があるということを感じます。



JICA補装具製作コース送別会で研修員と
(左から2人目が筆者)





②所沢フィーニュー少年少女合唱団&まめっちょ隊 ～病院 ニコンサート への協力

病院 3階病棟

3階病棟では入院している患者さんやご家族に季節を感じて頂く為の催しとして、毎年七夕会を行っています。昨年は7月7日に行うことができました。七夕会には毎月ボランティアに来て下さっている小野沢登志子先生のコーラスに加え、新所沢幼稚園に通っている幼稚園児で構成されている「まめっちょ隊」によるボランティア参加がありました。

「まめっちょ隊」は小中学生から編成される所沢フィーニュー少年少女合唱団の幼稚園児を対象としたものです。しかし幼稚園児といえども週1回の練習を行い、老人保健施設などへのボランティア活動も活発に行っています。当センターでは七夕会で初めてのお披露目になりました。

実現に至った経過としては、3階病棟に勤務している看護師の子供達が所沢フィーニュー少年少女合唱団に参加していることもあり、七夕会にボランティア参加の申し出がありました。所沢フィーニュー少年少女合唱団は七夕会が平日だった為、授業で参加することができませんでしたが、総勢30名の「まめっちょ隊」が立派に務めてくれました。

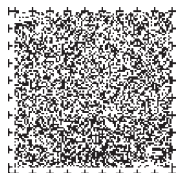
七夕会当日は、「まめっちょ隊」が病棟に到着した途端に賑やかになり、日頃病棟では聞くことのない可愛い声が響きました。しかし賑やかだったのもつかの間、いざ患者さんやご家族の前に立つと、「まめっちょ隊」が歌と踊りに日頃の練習の成果を十分に発揮してくれました。園児達のけなげで一生懸命に踊りを合わせている姿に癒され、見ているご家族の中には、入院している子供の幼い頃を思い出したと涙する母親もいました。「まめっちょ隊」の子供達も患者さんから歓迎されているのを交流から感じたのでしょう。クリスマス会のあと、自分たちの歌や踊

りが多くの人に喜んでもらえたと感動していたそうです。子供達にとっても思い出深いひとときになったことは私達にとっても大変嬉しいことでした。

七夕会を行う前は正直不安もありました。子供達が車椅子の患者さんを恐がらないだろうか、また車椅子と接触して子供達が怪我をしないだろうかと不安でしたが、そのような心配は無用でした。入院している患者さんの多くはご高齢な方々ですが、老いも若きも一緒にというのが良かったのではないのでしょうか。

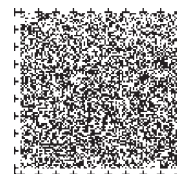
国リハは一昨年、創立30周年を迎えました。これからも所沢や周辺の方々に開かれ、愛される国リハでありたいものです。

今回は病院に勤務している看護師から地域との輪が広がりました。そういった一人一人のつながりを大切にして、センターとして地域に根ざした活動が途切れることのないよう、今後もボランティアを積極的に受け入れ、交流を続けていきたいと思えます。



平成22年度JICA補装具製作技術コース 研修実施報告

研究所 義肢装具技術研究部 三ツ本 敦子



平成22年9月17日から12月2日までの約2カ月の間、国際協力機構（JICA）の委託を受けて、研究所義肢装具技術研究部にて補装具製作技術コース研修が行われました。この研修は、日本における義肢装具の製作技術の伝達だけでなく、参加した各国の研修生らが指導的立場となり自国にて技術の普及活動を行うことを目的としています。

今年度の研修生は、コロンビアで義肢装具製作会社を起業したニコラスさん、そしてガイアナのリハビリテーションセンターで義肢部門のリーダーであるコリンさん、最後にミャンマーの病院に勤めているピューコさんの3名でした。

研修内容は、座学と実技に分かれています。座学では、基礎医学を始め、切断者のリハビリテーション、そして義肢装具の理論等の講義がありました。実技では、下腿義足・大腿義足について採型から完成までの製作手法を学び、義足ユーザーであるモデルさんのご協力のもと、コミュニケーションを図りながら製作した義足の適合を行いました。また、施設外研修として国際福祉機器展、日本義肢装具学会学術大会への参加や、小児療育センター、他県のリハビリテーション病院、義肢装具の部品メーカー、日本最大の義肢装具製作会社、義肢装具士養成校の施設見学も設けられました。

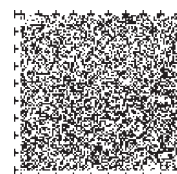
今年参加した3名の研修生の印象としては、知識・技術共にレベルがとても高く、研修中は質問やディスカッションが絶えないほど熱心だったと思います。慣れない土地で、設備環境も異なる中、彼らは協調性を育み、研修が進むにつれてリラックスし

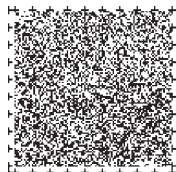
て臨むようになりました。母国語とは異なる英語での講義ではありましたが、皆臆することなく、自分の意見を述べ、知識を分け合い、助けが必要な時は手を貸しあうという風になら、お互いを尊重しあう良い雰囲気の中で研修が進みました。JICA研修の様子は、義肢装具技術研究部のホームページ（<http://www.rehab.go.jp/ri/hosougu/english.html>）にも紹介しています。

送別会では、「充実した研修内容だった」「指導者との距離が近く、丁寧に教えてもらって良かった」「帰国するのは嬉しいが、同時に寂しい気持ちもある」という感想を聞くことができ、お互い爽やかな気持ちで2ヶ月半の研修が終了しました。

現在、コロンビアでは義肢装具士の育成だけでなく義肢装具の支給制度の確立も重要視されてきているとのことです。またガイアナでは人材確保と共に将来的には義肢装具の教育機関設立も必要になってくると聞きました。そして3カ国の中で最も資材不足が深刻であるミャンマーでは、更なる義肢装具の普及と限られた材料で製作する応用力が必要とされ、未だ義肢装具に関する情報を入手することさえも困難であるという問題を抱えています。今回の研修が、それぞれの国で義肢装具の教育や普及に有効に活用されるよう、ニコラスさん、コリンさん、ピューコさん、今後のご活躍をお祈りします。

最後に、この研修にご協力いただいた外来講師の先生方、施設見学でお世話になった方々をはじめ、この研修にご協力いただいた多くの方々へ心より感謝いたします。





仮合わせ中のニコラスさん



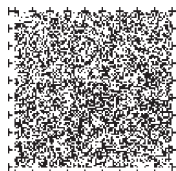
モデル修正中のコリンさん



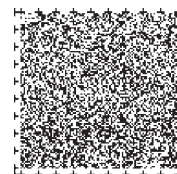
義足のチェックを受けているピューコさん



ソケットの製作を行っている様子



第5回 認知症のある人の 福祉機器シンポジウム開催報告



研究所 福祉機器開発部

昨年、12月5日(日)に、センター講堂にて、研究所主催による長寿科学振興財団補助事業研究成果報告会「第5回認知症のある人の福祉機器シンポジウム」を開催しました。会場にはおよそ80名の参加がありました。

認知症のある人の福祉機器は国内でほとんど知られていない状況でしたが、この5年間に開発が進み、ケアの現場での機器活用の有効性も確かめられるようになりました。今回のシンポジウムでは、これまでの認知症のある人の福祉機器開発の足跡を振り返り、将来を見据えて新たなスタートを切るための指針を模索しました。

まず第1部では、国内の高齢化の状況と、認知症になっても安心して暮らせる地域を構築するという目標を設定し、現在開催されている緊急プロジェクトについて、堀部賢太郎氏(厚生労働省老健局高齢者支援課認知症対策専門官)から講演していただきました。続いて研究の立場より、山内繁氏(早稲田大学研究推進部参与)から認知症のある人のための福祉機器開発における倫理審査について、その原理と研究執行上の制限をお話いただき、科学性を担保した研究デザインについて講演をいただきました。その後、国立障害者リハビリテーションセンター研究所・井上(福祉機器開発部長)より、軽度認知症のある方の自立支援手法の研究概要を報告し、臨床

評価の結果を紹介しました。

第2部では、4名の方から現場での取り組みを紹介していただきました。伊藤光世さん(若葉林あんしんすこやかセンター)は、在宅の認知症の方へ服薬支援機器を紹介し、使ってもらううちに、服薬が嬉しい話題となって薬の説明や契約が受け入れやすくなったことを、森本正治さん(エーザイ株式会社)は、服薬支援機器の普及開発を通じて、服薬支援だけでなく緊急時対応などの見守りを視野に入れた、多職種とご近所が連携するまちづくりについて報告されました。渡部幸一さん(株式会社生活科学運営)は、高齢者福祉施設の職員として、軽度認知症者の自立を促す福祉機器の導入が、職員やご家族の介護負担を軽減するだろうと期待していると報告され、大中慎一さん(日本電気株式会社)は、高齢者を気づかう気持ちをプログラムに入れることで(カスタマイズすることで)、家族の思いが入った存在としてロボットが位置付けられるだろうというお話をしてくださりました。その後会場の方とのディスカッションを行いました。

本館1階にて認知症のある人の福祉機器展示を開催し、PaPeRoのデモンストレーションと説明、そのほかの福祉機器の説明も行い、大勢の方に実際に触れていただきました。

